慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評：鈴木正崇著『東アジアの民族と文化の変貌：少数民族と漢族、中国と日本』風響社、2017年
Sub Title	
Author	藤野, 陽平(Fujino, Yōhei)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2018
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.23 (2018. 7) ,p.129- 131
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20180707-0129

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：鈴木正崇著

『東アジアの民族と文化の変貌――少数民族と漢族、中国と日本』

風響社、2017 年

藤野　陽平

本書は、相互変容という観点から、中国の少数民族と漢民族、日本を対象とし、東アジアの民族、文化変容を扱った大著である。本書は改革開放まもない 1980 年代から筆者が継続して調査を続けているトン族、ヤオ族、スイ族、トゥチャ族等について漢族との相互作用について分析する。なお、筆者が長年取り組んできたミャオ族に関する記述は 2012 年の前書で扱ったため、本書ではそれ以外の民族が扱われている。その後、少数民族だけではなく、マジョリティである漢族、さらに中国から日本へと伝わった文化へと論を展開させる。長期のフィールドワーク、膨大な知識と緻密な分析に裏打ちされた、大胆かつ繊細な大著である。

本書の内容を紹介する。序章の「民族と文化の変貌」では、漢族と少数民族との民族的境界は漢族が少数民族に一方的に影響したのではなく、相互交流や選択的受容によって定着した流動的なものであるとし、相互変容という本書を貫くテーマが示される。

第一章「女神信仰の現代的変容――中国貴州省トン族の薩瑪節をめぐって」ではトン族が祀るサ（薩）という女神信仰の変容を考察する。1949 年の中華人民共和国成立後中止されていたサの祭りは 1980 年の改革開放以降再生したのだが、政府主導で、観光化、社会主義や文化遺産化等の影響で大きく変容した。一方で、上からの政策に対抗するような伝統的な祭事を復活させる動きもみられ、上からの力とそれを換骨奪胎させる動きとが指摘される。

第二章「ヤオ族の民族動態に関する諸考察――広西大瑤山の調査から」では漢族やチワン族と交易を続けてきたヤオ族は年中行事や道教、風水、漢字の使用等に漢族の影響が強くみられるが、「自然を人間と切り離して対象化するのではなく、人間を自然の一部として、全体の調和や一体感を大切にして生活を律していく」という独自の意味も残されているという。

第三章「漢族とヤオ族の交流による文化表象――湖南省の「女書」を中心として」では女性だけが読み書きできるという湖南省の「女書」という文字について考察する。女書は単なる文字ではなく、文字を見て歌うこと、思いを籠めて書くこと等を含む広い概念で、疑似的な姉妹関係を基盤とするなど、社会的な意味も含まれる。この女書は最後の伝承者が 2004 年に死亡し、現在は再度修得した伝承者がつたえていて消滅しつつあるのだが、2000 年代に観光開発のための資源化が行われ、様々なイベントが行われるようになっているという。さらに 2010 年代には、現代風に再創造され、女書を題材とした映画が米国、中国、台湾で上演され、漢族とヤオ族の相互作用を超えたより広い文脈での動きが見出される。

藤野陽平「書評：鈴木正崇著『東アジアの民族と文化の変貌――少数民族と漢族、中国と日本』」
『三田社会学』第 23 号（2018 年 7 月）129-131 頁

第四章「貴州省のスイ族とヤオ族――祭祀・婚姻・葬制」は端節という儀礼を考察する。スイ族の特徴として水との関係が指摘され、魚、龍、馬が霊界とこの世とをつなぐ意味があり、銅鼓は龍や虎に変化する生命体として捉えられるという。本章ではスイ族とヤオ族以外にもトン族、ミャオ族、プイ族などの多くの少数民族との相互交流が示される。前節までは漢族と少数民族という一対一の分析だったが、様々な民族が行き交う中国西南部の特徴が示される。

第五章「貴州省の祭祀と仮面――徳江儺堂戯の考察」では儺の一種、儺堂戯を対象とする。貴州省東北部で儺堂戯を行うのは漢族、トゥチャ族、ミャオ族、イ族、トン族、コーラオ族などで、多民族間の相互変容を視野に儀礼の報告が行われる。ここでは悪しきものを払う儀礼過程が詳細に示されるが、開紅山という部分で「土老師が頭頂に小刀を打ち込んで舞って力を誇示する」とあり、その写真も掲載され（300-301 頁）、実際、頭に刀が突き刺さっているようだ。おそらく筆者や同行した野村伸一氏はかなり興奮して記録を取ったのではないかと推測されるが、その記述は冷静である。さらに日本、韓国を含む東アジア規模での縦横無尽な比較研究が行われ、その博覧強記さには感嘆せざるを得ないが、文献の整理だけではなく、実際に自らの足で調査したという点で他の研究者には到底まねできない独自性を誇っている。

第六章「福建省の祭祀芸能の古層――「戯神」を中心として」は福建省から台湾で広くみられる戯神、田都元帥がトリックスター的に秩序を攪乱し再構築する姿を明らかにしている。本章では少数民族ではなく漢族が事例となる。しかし、ここでも少数民族のショオ族との強い関りが明示され、漢族に少数民族が影響しているという逆の視点からの相互変容が紹介される。

第七章「追儺の系譜――鬼の変容をめぐって」では追儺について再度考察が深められる。中国から朝鮮半島を経て日本へと追儺がどう伝わり、どう変容したのかについて、古代中国の文献からはじまり、韓国、日本への展開について考察され、日本では追儺が仏教儀礼と結びつき、ケガレとしての鬼を駆逐するという形に変容したことを論じる。本書の前半で扱われたのは中国の少数民族という多くの日本人読者にはさほど身近ではない対象であったが、本書の後半ではじわじわと、節分の豆まきという読者の身近な世界の足元まで迫ってくる。

第八章「目連の変容――仏教と民俗のはざまで」では、仏陀の十大弟子の一人、目連に関する信仰、由来、儀礼を取り上げることで東アジアという規模での比較の可能性を探る。日本では目連は類似する地蔵に取り込まれたため現在では多くないというが、対馬での事例との比較を通じて日本における『目連の能』の位置づけを明示した。

本書は著者自ら 2012 年の『ミャオ族の歴史と文化の動態――中国西南部山地民の想像力の変容』（風響社）の姉妹編と位置付けている。いずれも 30 年にわたるフィールドワークの記録であり、全 566 頁からなる本書は前書（全 558 頁）とあわせて、1,124 頁におよび、その内容は一章ずつが新書 1 冊くらいはあろうかという濃さである。本書は今後の中国の少数民族研究にとって、避けられない先行研究となるだろう。

一方で、大著故の問題点に見える部分もある。例えば、調査村の詳細な記録等は、他地域の研究者にとってあまりに記述が細かすぎるのではないかという点等である。ただし、本書を読

み進めてみると、一見、些末ととられかねない情報が実は分析部に不可欠な情報になっていることに気がつかされる。単なる情報の羅列ではなく、その積み重ねに意味がこめられているというのも本書の特筆すべき点であり、自ら歩き、見、聞いて、さらに資料を丹念に読み込むことで得られたデータに語らせるエスノグラファーとしての実直な姿勢が見て取れる。

また、30 年間にわたる調査に基づいた書籍という点は本書の特徴の一つであり、高く評価されるべき点であろう。一方で、いや、それゆえにというべきだろうか、ライティングカルチャーショックやポストモダン人類学といった、この 30 年間の文化人類学の議論とは距離が取られている。この点は近年の若手研究者が好むと好まざるとに関わらず、とらざるを得ないポジションとは大きく異なっている。ただし、この点をもって本書が時代遅れの人類学と断ずることもできない。少数民族を扱いながらも、その文化の動態性を扱う点は、本質主義に陥っているわけではないし、8 章のトリックスターの議論に見られるように、自然・超自然、人・物、父方・母方、健常・障害等といったものが入り組む「さかさま」の力学の考察などは存在論転回の二元論批判の議論をすでに行っていたことになる。理論の流行り廃りにとらわれず、真摯な態度で人間、社会、文化の理解に取り組んできた著者の研究は、さらに評価すべきである。

以前、「宗教と社会」学会の『宗教と社会』（11 号、2005 年）誌上で、著者の『祭祀と空間のコスモロジー――対馬と沖縄』（春秋社 2004 年）が書評された際に、評者の福島邦夫は「多作な著者の著作の中でも特に長年にわたる精力的な調査と先行研究をまとめた代表作」と評した。こうした評価に対して著者は「評者は本書を私の「代表作」だという。しかし、それは死後に決するものだ。代表作は評者の酷評にこたえてこれから書かれるのかもしれない。」とのべ、600 頁を超える書籍を自らの代表作として扱われることを拒絶し、「無私の精神によって「作品」を書き続けたいと願っている」とまだまだ執筆し続けると宣言している。本書と『ミャオ族の歴史と文化の動態』によって筆者は有言実行してみせた。

著者は「私の研究の根源に山があり」（493 頁）と自らの研究に登山の要素を見いだしている。本書の読後感は、登山で山頂にたどり着いた際のそれに似ていた。ただし、どことなくすっきりしない部分もあったように感じている。それはおそらく結論にあたる部分がなかったためではないかと思う。1,000 頁を超える論考を進めてきて、最後にそれをまとめる部分がないのは上下巻の小説の 1 巻を読み終わった時のような、まだまだ続きがあるような感じが残される。

あとがきの部分で筆者は「本書の刊行は人生の中仕切りの仕事となる」（490 頁）、「初心忘るるべからず。愚直なまでに継続していけば、いつの日か集大成の日は来る」（493 頁）ともいう。こうした記述は、決して謙遜などではなく、著者はまだまだ先の集大成を目指しているのだろう。そうならば本書は著者の学問の中腹にも立っていないのかもしれない。東アジアから全世界へと広がる人類文化を扱うさらなる大著と、それをまとめ上げる理論化をもって、鈴木正崇の学問という名峰の頂上からの景色を見せていただきたい。

（ふじの　ようへい　北海道大学）